

フォルクスハウス第1号のモデルハウス[写真1]では、外壁の仕上げの切り替えも1階の内法高さに行っています。普通は1階の階高で切り替えますが、このほうがスマートに見えますからね。これを真似したところも多いと思います。上はメンテナンスフリーで、下は左官でメンテナンスできるような材料にしています。

家づくりへの参加

——DIYに着目されたり、オープンな情報を組み合わせてほしいものをつくる発想には、『Whole Earth Catalog』や1970年代のカウンターカルチャーの影響を感じます。

秋山 その通りです。『Whole Earth Catalog』には相当影響を受けました。膨大な情報を個人のもとに取り戻す、DIYはそこからですよ。

その頃、勃興してきたコンピュータの世界、パーソナルコンピュータという言葉、コンピュータが自分自身で持てるんだ、ということにおおきく突き動かされました。1979年に当時34万円でApple IIを手に入れました。

——フォルクスハウスを出された頃の文章を読むと、建築家の設計した家を批判されています。

秋山 批判しているつもりはなくて、予定調和的な家、「これがきれいだろ」というつくり方をした家は、あまり魅力を感じません。家は時間とともに変わっていくものだから、時間によって変わらない芯の部分がしっかりできていたら、あとはどうなってもいいと思っています。

——フォルクスハウスも3,000棟といった数になると、工務店が各地で設計する家のデザインをコントロールしきれないという問題は出てきませんか？

秋山 いや、コントロールする必要はないのではないのでしょうか。いろいろなことをみなさんおやりになるんですよ。建築家と工務店を比べると、建築家はいろいろな問題を毎回解決しなくてはならない。設計・施工の工務店は、気候もそうだし、限られた範囲で同じような注文が来て問題点ははっきりしている。だから工務店は有利で、「建築家は一度失敗したら直せるのは3年後だ。君たちは失敗しても3カ月後に直せる」と言っています。工務店はそうやって精度を上げていきます。僕らよりも工務店はその場所のことや気候などに詳しいし、切実に解決しなければならぬ問題があります。それがOMソーラーを工務店のものとした理由でした。

Be-h@usはセルフビルドしている人もいますが、やっぱり素人だけでは駄目ですね。理屈も通らないし、手す



あきやま・とういち

1942年東京生まれ。東京藝術大学美術学部建築科卒業、東孝光建築研究所入所。ランド計画研究所を設立。オーエム研究所設立に伴いメンバーとなる。以降、OMソーラーの住宅を数多く設計し、木造軸組パネル工法のフォルクスハウスやDIYを前提としたBe-h@usを開発。現在は秋山設計道場等で設計者の育成にも携わる。著書に『Be-h@usの本』（九天社、2004年）など

り一つとっても、なかなかできません。形を決めるのはプロでなければ難しいと思います。ですからマニュアルが必要ですよ。アメリカのセルフビルドの教科書を見ると、無理はしていません。そのとおりにやれば、それなりになる。Be-h@usも洗練されたキットになっていて「どうぞ」とやりたかったなと思いますが、ちょっと早すぎましたね。

Be-h@usの規格寸法の標準サッシ「Be-window」をつくってくれていたのがアイランドプロファイルですが、いろいろな経緯があって、NPO法人 BE-WORKSと一緒にBe-h@usを進めてきた建築家・石原信さんがその社長になりました。その石原さんが最近、千葉にセルフビルドで家を建てています。それでBe-h@us的なことをやろうと、骨組みとパネルをつくってくれるところはあるかという話になりました。その時に鹿児島島のシンケンのチームが組み立てると早いし安いという話になり、シンケンからWITsというチームが7人で、鹿児島で加工した材料を持ってきて10日で組み立てました。WITsはシンケンの社内大工の組織で、鹿児島から材料を持ってきて組み立てて、疾風のように去って行く。あとは町場の内装屋さんが仕上げたら家になる。

工務店のありようも変わってきて、地域にこだわらなくてもいいようになりました。みんな、大工がいなくてもパネルだ、となる。既製のプランでいいという人はたくさんいますから、いろいろな供給方法が出てくる気がします。OMソーラーを始めた頃の工務店も代替わりして、これからどう家をつくるか揺れ動いている時期だと思います。——DIYのマニュアルだけでなく、家全体をどう設計するかについてもマニュアル化はありえますか？

秋山 やはり自ずとできるとしか考えていませんね。入隅をつくるときは、片方は空いていたほうがいいというのは、つくり方とも結びつくでしょ。

メカノをいじったことありますか？ 壊しながらつくっていくんです。それができるようなやり方であってほしいとも思います。住宅も完成されたものではなく、いつも途中であっていい。それが途中で見えなくするのは、つくり手の訓練でもあるし、住み手の訓練でもあります。